地方都市における
地域まちづくり活動の意義に関する研究
−埼玉県本庄市「本庄まちNET」を対象として−

望月　友貴[1]・佐々木　葉[2]

[1]学生会員　早稲田大学大学院創造理工学研究科建設工学専攻
（〒 169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1，E-mail:yuki-mochi3086@toki.waseda.jp）
[2]フェロー会員　早稲田大学教授　創造理工学部社会環境工学科
（〒 169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1，E-mail:yoh@waseda.jp）

住民参加のまちづくりが推進される中で，地域住民へまちづくり活動の参加を促す意義を把握することは重要である．本研究ではこの意義を探るために，会員の興味から主体的に活動を行ってきた市民活動団体・本庄まちNETを対象に，その活動実態とその特徴を把握した上で，醸成された会員の心情を明らかにした．結果として，活動負担の軽減などによる継続性を担保した団体運営や，リスクをとり個人の仕事として活動する会員の存在が明らかとなった．また活動が「地域や他者を客観的に認識する視座」を養う場となっていることを明らかにし，会員個人が活動に参加する際にもたらされた意義への示唆を得た．

キーワード: *市民活動団体，地域まちづくり活動，本庄まちNET，埼玉県本庄市*

１．序論

⑴背景と目的

少子高齢化や都市への一極集中，地方自治体の税収減少などに伴って，基礎自治体による公共サービスの質の低下や行政が担ってきた活動の縮小化が懸念されている．このような状況に対しては，事業の民営化やPPP・PFIが推進され[1]，民間の知恵と資金を活用する動きが加速している．また地域計画などの策定過程においては，地域住民が主体的に関わることが重要視され，住民が組織するまちづくり協議会やワークショップの導入といった，住民参加のまちづくりが一般的になってきた．さらに地域外の専門家を派遣した行政による伴走支援[注1)]が行われる地域もあり，結果として地域資源の保存や活性化に寄与するような，継続的な住民主体の動きが各地で起きている．その一方，一部の専門家や行政職員によって事業や計画が進められ，住民の参加が後手に回るなどして，住民参加の取り組みが形骸化している場合も見られる[2]．

他方で地域内の住民コミュニティにも大きな変化が生まれている．伝統的に公共サービスの一端を担ってきた町内会や自治会といった地縁型組織は，暮らし方の変化や地域住民の高齢化，加入率の低下などの問題が生じたことで弱体化が見られている[3]．その一方，まちづくりに限らない，例えばスポーツや手芸といった趣味を共有する団体や社会福祉団体といったテーマ型組織も多く存在している．またインターネットの発展により，場所の制限を受けないコミュニティが盛り上がりを見せているように，住民それぞれが複数の団体やネットワークを持ちながら地域で生活しており，地域を担う主体や暮らしを支えるコミュニティなど，現代社会に適応したそれらのあり方が問われている．

地域の環境を形成し維持する主体のあり方に示唆を与えるものの一つとして「ローカル・ガバナンス」が提唱されている．鳥越[4]は「近隣からなるコミュニティだけでなく，市町村役場やNPO，企業・商店などの私的事業体，研究機関，個人的に関心のあるボランティアなどさまざまなアクター（主体）がそれぞれ自主性を持って関与し，ともに当該課題を解決」する考え方としている．また羽貝[5]は「行政と住民や民間組織の協働」と「住民と民間組織相互の共同」をあわせて「きょうどう」と呼び，その重要性を指摘している．さらに伊藤[6]はコミュニティ・マネジメントの実践活動から，多様な市民による熟議の場が重要であることを指摘し，これからのコミュニティ政策においては地域自治制度と合わせて熟議システムのマネジメントが求められるとしている．

以上のことから，地域を担う主体のあり方を考える際には，行政や民間などの枠組みを超えた取り組みが重要であり，それらが機能するためには地域住民の主体性が

不可欠であると考えられる．地域内に数多くの市民活動やコミュニティが存在する中で，これまで以上にまちづくり活動への参加を促すためには，住民が主体的に地域まちづくり活動へと参加する，また住民へその参加を促す意義を明らかにすることが重要であると考えられる．

本研究ではこのような問題意識から，多彩なバックグラウンドを有する会員が集まり，会員の興味・関心をもとに，15年以上に渡って地域まちづくり活動を行ってきた市民団体「本庄まちNET」を対象に，その活動の実態と特徴を明らかにすると同時に，活動によって醸成された会員の心情を明らかにすることを目的とする．その上で，団体の存在や，活動の場が会員個人にとってどのような意義をもたらしたのかを考察したい．

(2) 研究の方法

本研究では，本庄まちNETによる提供資料を用いた文献調査と活動場所の現地調査を実施すると同時に，会員に対するヒアリング調査を実施する．まずは2章で対象地と対象団体の概要，地域における対象団体の位置付けを整理する．次に，3章で設立の経緯と活動内容の概要から，本庄まちNETの活動実態とその特徴を明らかにする．4章ではヒアリング調査で把握された会員の心情とその特徴を明らかにした上で，5章では先述した伊藤の考えを引用し，活動に参加する意義について考察を行う．文献調査には，総会資料や本庄まちNET発行の冊子[7]，都市計画マスタープラン[8]や総合振興計画[9]などを用いた．

(3) 既存研究の整理と本研究の位置付け

本研究に関連する既存研究として，地域まちづくり活動組織の継続性に関する研究や，市民活動への参加意識に関する研究が挙げられる．

a) 地域まちづくり活動組織の継続性に関する研究

地域まちづくり活動組織の継続性に関する研究は多く存在する．その中でも組織構造ではなく，会員個人や活動に直接影響する援助体制などに着目して整理を行った．

まず山村[10]は，自発的に始まった活動が世代を超え30年以上に渡って継続している市民活動団体を対象に，継続要因を明らかにした．その中で，作業負担の分散や基本的継続活動と時流による活動の組み合わせによるモチベーションの維持などを継続要因として挙げ，その背景には祭事の運営といった伝統的慣習が関連することを指摘している．また寺田[11]は沖縄県北中城村の緑化活動を行う団体を対象に，景観形成に与える影響と団体の継続要因を明らかにしている．継続要因としては，会員による自主性や，低予算化による負担の低減，外部からの資金的援助を挙げている．一方で，本研究と同様に行政による住民参加の取り組みから自発的に活動が始まったまちづくり活動団体に着目している伊藤・森本[12]は，その継続要因として中心となるキーマンの存在や参加者相互の繋がりと信頼関係などを挙げている．

b) 市民活動への参加意識に関する研究

市民活動への参加意識については，市民活動への参加の有無を問わず，流域や属性などに着目した研究が挙げられる．浅野ら[13]は瀬戸内海流域の住民に対するアンケート調査を実施し，環境保全に関する市民活動への参加状況を把握している．その中で参加実績のある住民は，環境問題への意識の高さや具体的な団体名を知っている傾向がある一方で，参加希望を示す住民は友人からの誘いといった受動的傾向があることを明らかにしている．また地方大学の学生を対象とした榊原ら[14]の研究では，大学所在地に対する学習経験を有する学生のまちづくりへの参加意識が高いことを明らかにしている．さらに倉敷市民を対象にアンケートを実施した芝池・谷口ら[15]は，地域への信頼や歴史・文化に対する誇りが，今後の地域形成の取り組みへの意識醸成に影響を与えることを明らかにしている．

c) 埼玉県本庄市におけるまちづくりに関する研究

埼玉県本庄市に関連する研究として，まず早稲田大学建築学科のチームによる旧本庄商業銀行煉瓦倉庫に関する調査・実践研究[16][17][18]がある．このプロジェクトは本庄市による調査依頼によって行われた．また地域の特徴を探る手法として添田[19]は，地形と土地利用による「構造の図」と，場所への意識を示した「意味の図」を複数年代で重ねることで可視化した多層化地図を確立した．特に場所への意識については，本庄まちNETを対象に地域のエピソードを抽出するワークショップを行っており，意識が集中する場所を明らかにしている．

d) 本研究の位置付け

まず本研究では，対象団体としてまちづくりや環境保全といった特定目的のために活動する団体ではなく，会員の興味・関心によって活動が生まれてきた団体に着目する点に特徴がある．また本研究は住民個人が市民活動に参加することの意義に迫るものであり，既存研究のように市民活動の継続や活性化の組織構造に着目した研究ではなく，会員個人の心情や活動への参加意識，本業との繋がりなどに着目することが本研究の特徴である．

２．研究対象の概要

(1) 対象地域　本庄市の概要

本庄市は埼玉県の北西に位置する人口77,752人[20]の地方都市で，JR高崎線，JR八高線，上越新幹線，関越自動車道，国道254号線，国道462号線などの主要道が縦横に走る交通の要衝である．室町時代には武蔵武士団の児玉

党の子孫が本庄城を築いたことから城下町として栄えた後，江戸時代には中山道が整備されたことで宿場町へと姿を変えて，中山道最大の宿場町となった．また明治期の近代化以降は，江戸時代から盛んであった養蚕を軸に，生繭市場が開かれたことで発展した．このような歴史的経緯や，近隣地域と異なり戦時中の空襲を受けず，街中の大規模開発から逃れてきた経緯から，街中には様々な年代の蔵や古い建物が残されており，それらの保存活動も行われてきた地域である[21]．1993年には周辺地域も含めた児玉郡市（現在の本庄市・美里町・神川町・上里町の一帯）は「本庄地方拠点都市地域」に指定されており，本庄市はその中心的役割を担っている．また2006年には旧本庄市と旧児玉町が合併し現在の本庄市となった[8)9)]．

(2) 対象団体　本庄まちNETの概要

本庄まちNETは，2007年度から活動する市民活動団体であり，「本庄地域を拠点として，有志の市民一人一人がまちづくりへの思いと願い，自らの意思をもとに自主的に活動し，互いに交感・支援し合うなかで，地域内外の市民団体や専門家，行政等の方々との連携と協働を深め，自立性のある豊かな地域社会の実現に資すること」を目的に，市内外に住む30代～80代の約20名が会員として参加している．会員の参加については，個人間の繋がりを重要視していることから，広く募集を呼びかける活動は行っておらず，基本的に既存会員の紹介等の参加となっている．そのため参加以前から会員間が知り合いである場合があり，会社員や主婦だけでなく，建築士や商工会議所職員，学生，行政職員，議員といった多彩なバックグラウンドを有する住民が参加している．さらに会員の他に専門アドバイザーを設けており，大学教員などの専門知識を有する会員が参加し，活動をサポートしている．これらの活動を支える資金源は会費が主なものとなっており，補助金は大きな資金が必要な場合に申請する形をとって，これまでに2回の申請[注2)]を行っている．

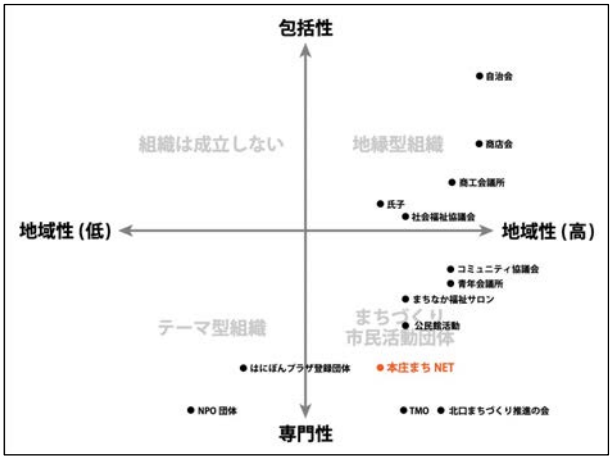

図-1 本庄市における市民活動団体の位置付け

(3) 地域の市民活動における本庄まちNETの位置付け

本庄まちNETが活動する埼玉県本庄市は，地縁型組織が多く残っているほか，テーマ型組織をはじめとした市民団体なども活発に活動を行っている地域である．このような地域の市民活動の実態を把握するために，住民組織・市民団体を対象に，藪谷ら[22)]の研究を参考として対象領域と空間領域によって位置付けの整理を行なった（図-1）．地域には中心市街地の商店会や各区域の自治会といった地縁型組織が多く残っているが，高齢化の進行により対外的な活動が行われることは少ない．また商工会議所や青年会議所も活動を行っており，特に商店会によるイベント活動など，地域まちづくり活動を商工会議所がサポートして継続させている場合もある．一方で公民館や市民活動交流センター「はにぽんプラザ」で活動を行う市民活動団体は多く[注3)]，手工芸や芸術，スポーツ，料理などをテーマとした活動が行われている．さらにまちづくり活動に着目すると，本庄駅北口の活性化を目的とした北口まちづくり推進の会や，TMO団体，コミュニティ協議会などがあるが，団体数としては少ない．

このような地域における本庄まちNETの位置付けは以下の通りである．本庄まちNETの活動地域は本庄市の中心市街地に集中しているが範囲が限定されるものではなく，また会員も市内外から集まる団体である．活動テーマについてもまちづくりを中心としているが，特定のテーマに限定することは行っておらず，会員の興味・関心から始まることが多いためにこのように整理された．

3．本庄まちNETの活動実態

(1) 本庄まちNET設立の経緯

本庄まちNETの設立には，(財)本庄国際リサーチパーク研究推進機構（現：(公財)本庄早稲田国際リサーチパ

表-1 本庄まちNET設立の経緯

年	できごと
1982年	早稲田大学本庄高等学院　開校
1993年	1市3町が本庄地方都市拠点地域に指定
1995年	本庄地方拠点都市地域計画の承認 本庄科学田園都市構想の発表
1996年	早稲田国際リサーチパーク基本構想の始動
2000年	本庄拠点・環境大学　スタート 早稲田大学「本庄キャンパス校地利用計画」決定
2002年	(財)本庄国際リサーチパーク研究推進機構の設立
2004年	上越新幹線本庄早稲田駅開業 早稲田リサーチパーク・コミュニケーションセンター竣工式 早稲田大学大学院国際情報通信研究科開校 <環境共創>まちづくり大学　スタート
2005年	まちづくり大学2005　スタート
2006年	まちづくり大学2006　スタート 「本庄まちNET」設立準備
2007年	本庄まちNET　活動開始 早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科開校

ーク）が2005年度から実施した「まちづくり大学」が関係している．このことから現在の本庄早稲田駅周辺における構想・計画の変遷と，「まちづくり大学」事業の開始までの経緯について，**表-1**に整理を行った．

1993年の「本庄地方拠点都市地域」指定以後，現在の本庄早稲田駅周辺地域は「早稲田リサーチパーク地区」として位置づけられ，「先端的科学技術・産業創造に関わる国際貢献のできる研究開発，人材育成機能，情報通信・交流機能の集積を図ることが期待され」[23]た．このような計画の下に，2004年に本庄早稲田駅が開業，2006年からは本庄早稲田駅北口の土地区画整理事業が始まり，大規模な開発が行われた．1982年に早稲田大学本庄高等学院を設立していた早稲田大学も，(財)本庄国際リサーチパーク研究推進機構の設立に協力するとともに，2000年には本庄キャンパス校地利用計画を決定，大学院の一部研究科開設へと繋げている[24]．

このような開発経緯において，(財)本庄国際リサーチパーク研究推進機構の前進である本庄国際リサーチパーク推進協議会は2000年度から人材育成事業「本庄拠点環境大学」を開始している[25]．2004年度にはテーマを環境問題からまちづくりへ，講座内容にもフィールドワーク等を盛り込んだものへと徐々に変化させ，「本庄拠点・〈環境共創〉まちづくり大学」へと名称変更，2005年度からは「まちづくり大学」として事業が実施された．しかし2007年度には事業資金の問題から「まちづくり大学」の継続が困難になり，この「まちづくり大学」の参加者有志によって，活動の継続を目的に本庄まちNETが設立された[26]．なお本庄まちNETの代表は，〈環境共創〉まちづくり大学からイベントのコーディネーターを務めていたほか，副代表の一人であるa氏は(財)本庄国際リサーチパーク研究推進機構の統括マネージャーとして参画しており，公的事業を支えるスタッフが主体的に本庄まちNETの設立を呼びかけていた経緯がある．

(2) 「まちづくり大学」時の活動内容

2005年度と2006年度に開催されたまちづくり大学のプログラムを**表-2**に示す．2005年度のまちづくり大学は，2004年度までの本庄拠点環境大学/本庄拠点・〈環境共創〉まちづくり大学の事業から，テーマを抜本的に変更してまちづくりへ移行したり，フィールドワークなどを多く盛り込むプログラムとしたりするなど，大きな方針転換が行われたタイミングである．また2006年度のまちづくり大学においては，オープン講座やオープン発表会がプログラムに盛り込まれ，まちづくり大学の参加者以外も広く関わりを持つ形で事業が実施された．

このまちづくり大学においては，参加者が歴史・建築・食の3つのテーマに分かれ，グループワークを行う形となっている．このようなグループワークは，まちづくり大学の開催日以外の自主的な活動へも発展し，参加者有志による交流が積極的に行われていた．結果として，これらのグループワークは後述する「五臓六腑の会」や建築などの活動を行うプロジェクトチーム（以下，PT）へと引き継がれ，本庄まちNETの活動の土台となってきたことが分かる．

(3) 本庄まちNETの活動

前節のように，まちづくり大学での活動の延長線上として行われてきた本庄まちNETの活動は，PTによる活動（**表-3**）と会全体での活動の大きく2つに分けることができる．特に本庄まちNETの活動の大半を占めるPT活動について，PTの設立過程を整理すると以下のようになる．まず興味・関心から活動を始めたい会員が活動への参加を募る．会則によって，3名以上の会員によってPTが設立できることが規定されているため，3名以上の会員の賛同によってPTが設立され，毎年開催する総会での承認をもって活動がスタートする．その後は，PTごとに予算申請を行うことで，活動資金を確保していく．

このようなPTの設立過程を経る一方で，PT自体の枠組みが曖昧であることから，会員はPTへの所属意識をあまり有していない．そこで本研究では，PT活動ごとではなく，これまでに行われてきた活動内容，特に定期的な活動，団体内で行われてきた活動，会員個人が本業へと繋

表-2 まちづくり大学のプログラム

	程	内容	概要
まちづくり大学 2005	2005年9月17日	開講式・第1回講義	講義は、「歴史・自然・環境・街並・食」などのテーマによるまちづくりの考え方を学ぶ。
	2005年10月15日	第2回講義	
	2005年10月29日	現地見学・ワークショップ(1)	実際に児玉郡市・岡部町を訪れ、郷土料理や特産品を食べながら、自由な意見交換の中でまちづくりを考える。
	2005年11月19日	現地見学・ワークショップ(2)	
	2005年12月10日	現地見学・ワークショップ(3)	
	2006年1月14日	グループワーク	見学が学習したことを参考に「まちづくり」の自由な提案（発表内容）を各グループでまとめる
	2006年2月18日	オープン発表会	オープン発表会+交流フォーラム
まちづくり大学 2006	2006年9月30日	第1回講義・グループワーク	「歴史・景観」「建物・街並」「食・農・風土」の3つのグループに分かれて活動を行う
	2006年10月21日	第2回講義・グループワーク	
	2006年11月5日	現地見学(1)	深谷のまちづくり活動に学ぶ（深谷市先進地訪問）
	2006年11月26日	まちなかシンポジウム	オープン講座として各地の専門家によるパネルディスカッションを受講
	2006年12月9日	現地見学(2)	上里まちめぐりツアー～くらしと教育～
	2007年2月24日	オープン発表会	オープン発表会+まちなか交流フォーラム

げた活動に分けて整理を行った（**表-4**）．活動が行われた場所を**図-2**に，活動の変遷を**図-3**に示す．

a)定期的な活動

本庄まちNETでは定期的な活動として「月に1回の例会（以下，月例会）」の活動を設立初期から行ってきた（**図-4**）．また毎年5月には総会として，前年度の活動の振り返りと該当年度の活動申請が行われている（新型コロナウイルス感染症拡大のため，2022年8月時点で不定期開催）．この月例会では，各PTの活動報告や会員個人の近況報告などが行われ，最も回数の多い会員間の交流の機会にもなっている．また会員個人の近況報告などからは，地域の社会問題への議論へと発展する場合もあり，結果として新たな活動やPTの設立契機となっている．

b)団体内で行われてきた活動

先述したように，本庄まちNETではPTを中心として様々なテーマの活動が活発的に行われてきた．例えば，「陸船車模型復元」の活動は，陸船車は江戸時代に使用されていた，世界最古の自転車機能を有するとされる足踏み式の四輪車を再現しようというものである（**図-5**）．活動は，専門アドバイザーによる指摘[27]を契機として，興味を持った会員がPTを設立し，模型から当時の走行速度の再現を目指して活動が行われてきた．2019年には走行可能な実物大模型が完成し，2021年の東京五輪聖火リレーにて使用されている．この他にも各種メディアへの露出やイベントへの出展などにより，地域資源としての魅力を発信する対外的な活動を続けてきている活動である．また「料理体験」の活動は，地域の食文化を体験する活動として，栄養士の資格を持つ会員が郷土料理や季節料理のレシピを考案し，会員それぞれが育てた野菜などを持ち寄って，会員自らで料理を作っている．さらに「賀美橋ランプ復元」活動では，2008年に国登録有形文化財に指定されたRC桁橋の賀美橋が，竣工時に親柱へ設置されていたランプ（橋灯）の復元を目指して，現場のまち歩きや勉強会などが行われた．加えて専門アドバイザーによるランプの意匠推定[28]や，会員の市議（当時）による行政への働きかけといった団体外の動きも相まり，2016年度には本庄市によってランプが復元されている（**図-6**）．なお詳細設計は建築士である本庄まちNETの代表が実施した．

表-3 本庄まちNETの進行中のPT活動

PT名	活動内容
からくり門弥PT	享保年間に本庄市の庄田門弥が発明した，世界最古の自転車である「陸船車」を原寸復元する．
建築・地域デザインPT	本庄駅北口の市街地を中心に，具体的な建物・区域区画の改修，調査検討や計画づくり等を行う．
五臓六腑の会PT	児玉郡市のおいしい食材や路地裏に隠れた食堂などの地元の食文化を五臓六腑で堪能する．
地域産業ふれあいPT	地域に根ざしたさまざまな産業の営みを体験し，先人たちの知恵やものづくりの楽しさを学ぶ．
都市農園事業計画PT	耕作放棄地再生のための取り組み等をベースに，本庄市内の農地を都市農園等へ再生・利用を目指す．
本庄地元学PT	本庄地元学だよりを発行するとともに，月例会での地元学の講座を行う．

表-4 活動内容の概要

	活動	活動内容
定期的な活動	月例会	本庄まちNET設立から実施されてきた中心的活動の1つであり，2時間程度の中で，PT活動の近況報告や会員個人の近況報告などが行われる．これまでに「一の蔵（代表の建築設計事務所）」や市民活動交流センターなどで開催されてきた．
	まち歩き・見学会	「まちづくり大学」時代から継続的に行われてきた活動である．本庄市内に限らず，埼玉県北東部や群馬県南部などの周辺地域でのまち歩きも行っているほか，見学会では本庄周辺にある工場やお店，さらに染物や豆腐づくりの体験などを行なってきた．
PTによる活動	陸船車の模型復元	世界最古の自転車機能を有するとされる足踏み式の四輪車の模型を復元する活動である．これまでに様々な縮尺の模型が製作され，当時の走行速度を再現するために試行錯誤が続けられている．2021年に行われた東京五輪の聖火リレーで使用されるほか，各地のイベントで展示されるなどして，地域資源を発信活動となっている．
	料理体験	総会やオープン古ハウスなどのイベント時には，五臓六腑の会PTを中心に会員自らで料理を作り，食文化を体感する活動を行っている．これまでに大豆や古代豚を使った料理や，郷土料理のつみっこ，お花見弁当などを会員が考案したレシピで作られてきた．
	賀美橋ランプの復元	国登録の有形文化財である賀美橋の親柱に設置されていたランプの復元を目指した活動である．PT活動として，周辺地域のまち歩きや本庄地元学だよりなどでその歴史性の重要性などを認識し情報発信してきた．2016年には市が復元事業を実施し，ランプが復元された．
会員が事業主体として責任を負う活動	宮本蔵の街	旧中山道の酒問屋・小森商店の跡地活用のプロジェクトである．敷地内の3つの蔵はカフェや事務所として利活用され，残地を住宅地に分譲し，新設道路は市道に寄付された．また電柱を建物背後に設置する，道沿いに塀を作らないといった景観的配慮がなされた．2016年に日本建築家協会の「地域に根差す建築作品・活動」で表彰された．
	若泉市民農園	特定農地貸付法を活用したNPO法人AZアグリ倶楽部が運営する市民農園で，都市農園事業計画PTとしてその事業化前から協力してきた．アグリ倶楽部が管理する敷地の野菜栽培に本庄まちNETの会員も家族ぐるみで参加したり，弁当を作って花見をするなどで関わってきている．
	本庄地元学だより	元本庄市歴史民俗資料館庁の専門アドバイザーが著者となり，2012年から発行されてきた．「歴史や地理，文化，経済などを，総合的な視点にたち地域を研究する」ものとして，まちづくりに活かすことを目指したものであり，各テーマでは他のPT活動の学術的な内容も扱っている．2017年には第1号～第36号までを再編集した冊子を発行した．

c)会員がリスクを取って仕事として実施した活動

PT活動を中心とした団体内での活動の一方で，会員個人が事業主体となってリスクを取りながら実施した活動も存在する．例えば「宮本 蔵の街プロジェクト」は，建築士の本庄まちNET代表が開発主体として実施した中山道沿いの酒問屋の跡地再開発のプロジェクトである（**図-7**）．敷地内の歴史的価値が高いと考えられた明治・大正期につくられた3軒の蔵を残しながら宅地として整備し，蔵は本庄まちNET代表による建築事務所（一の蔵）・コミュニティカフェ（二の蔵）・貸しスペースや事務所として活用している．また，新規に整備した敷地内道路の市への寄付，建物背後への電柱設置といった景観的配慮，近隣工場や旧酒問屋で使用された煉瓦や材料の利活用といった地域性を高める工夫が各所に施されており[29]，2016年には（公財）日本建築家協会の賞を受賞している．本庄まちNETでは2009年の閉店前から酒問屋との交流があり，閉店の際に歴史的価値を有する蔵の保全を目的として，跡地活用を考える見学会などを実施した経緯がある（**図-8**）．この場所の重要性を認識していた本庄まちNET代表は，自らが事業を進める中で，月例会で意見を求めるなどしてプロジェクトに活かしていたほか，完成後の利活用として貸しスペースや一の蔵・ニの蔵でイベントや月例会を開催するなど，事業と本庄ま

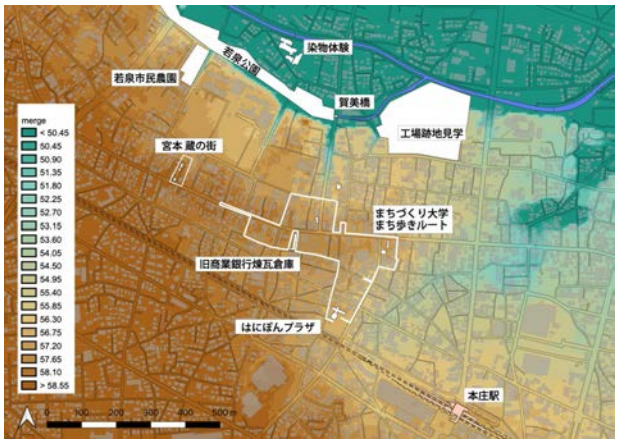

図-2 活動が行われてきた場所

ちNETの活動を連携させている．

また「若泉市民農園」は，民地を特定農地貸付法の活用によって市民農園として活用したプロジェクトであり，AZアグリ倶楽部（以下，アグリ倶楽部）が運営している（**図-9**）．この若泉市民農園の話を持ち込んだ本庄まちNETの会員がアグリ倶楽部の代表であり，開設時には都市農園事業計画PTの活動や本庄まちNETの会員有志によって開催された合宿を通して，事業化をサポートしていた．結果的に本庄まちNETでは運営を行わずに，アグリ倶楽部が運営することとなったが，例えばアグリ倶楽部が管理する敷地の野菜栽培に本庄まちNETの会員が家族ぐるみで参加したり，弁当を作って花見をするなど，農業を体験し楽しむ場として活動が行われ，このプロジェクトも団体の枠組みを超えた活動が展開されている．

さらに「本庄地元学だより」は，元本庄市歴史民俗資料館長の専門アドバイザーが専門分野の考古学の視点も踏まえ，様々なテーマに対する研究成果をまとめたものである（**図-10**）．2017年には第36号までを再編集した冊子[7]を発行した．この研究成果の中には他のPT活動を学術的にサポートするものもあり，陸船車や賀美橋ランプの復元活動などに活かされている．この2017年に発行した冊子の制作費用は，全額を本庄まちNETで負担するのではなく，補助金の活用やPTの活動資金のほか，著者の自己資金も用いられている．つまり，この活動においても本庄まちNETの活動に留まらず，本業であった学芸員としての活動と繋げて行われてきたことがわかる．

これらの活動は本庄まちNETの活動に限らず，リスクをとってその職の専門性を発揮する，会員個人の仕事としても行われてきている．本庄まちNETでは，会員個人の生業と市民活動を関連づけて行う活動もあり，これは前述のa)b)などの活動とは性質が異なる．このように市民活動に対する会員個人の関わり方が複数存在し，それらが共存していることは，本庄まちNETの活動の特徴の一つであると考えられる．

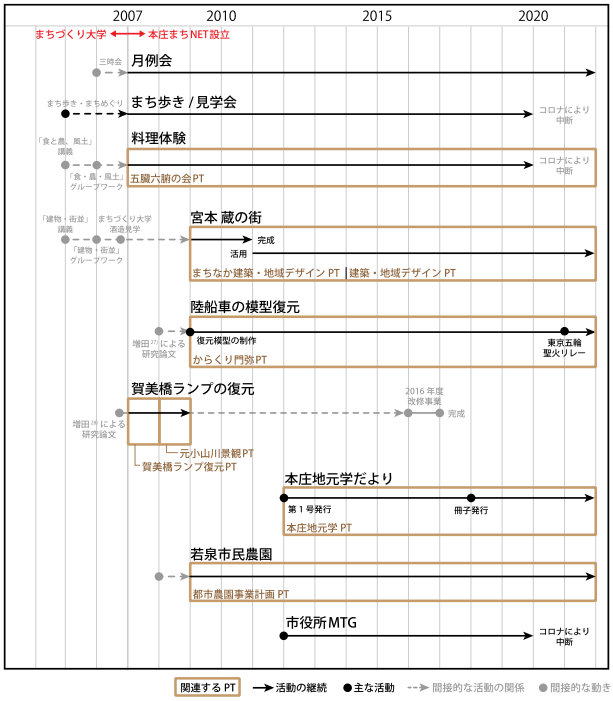

図-3 本庄まちNETの活動の変遷

(4) 活動における他団体との関係性

前節のような活動を行ってきた本庄まちNETであるが，会の目的に「地域内外の市民団体や専門家，行政等の方々との連携と協働を深め」ることを掲げ，実際に他の市民団体や行政との連携が行われてきている．そこで本節では，本庄まちNETの活動における他団体との関係性に着目し，協働・共同の実態を把握する（**図-11**）．

例えば，2012年度から月に1度開催されてきた市役所とのミーティング（以下，市役所MTG）は，本庄まちNETが主催した「市民協働のまちづくりシンポジウム」を契機として，本庄まちNET代表と市役所の各課担当者で始まった情報共有の場である．回を重ねるごとに，様々な

図-4 月例会の様子

図-6 賀美橋の復元ランプ

図-5 陸船車の復元模型

図-8 酒問屋の跡地見学会

図-7 宮本 蔵の街の全景

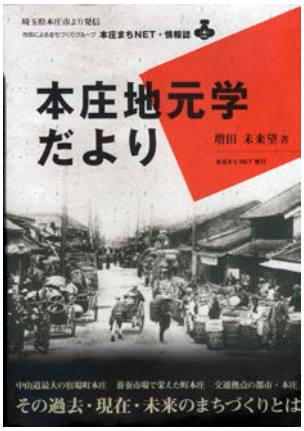

図-10 本庄地元学だより[5]

図-9 若泉市民農園

団体や組織が参加することで，近況報告やイベント時の連携などがされてきており，本庄まちNETと行政間の協働だけでなく，他団体と行政の協働，本庄まちNETと他団体との共同などが生まれる契機となっていることがわかる．特に本庄まちNETにおいては，市役所MTGを通して補助金に関する意見交換・情報共有が行われたほか，市役所主催のワークショップへの参加依頼を受け，建築士という専門職の知見を生かして，総合振興計画の策定や市民活動交流センターの設計変更などに繋がる成果を生んでいる．また商工会議所職員である副代表b氏が，仕事で作り上げてきた個人の繋がりを活かし，工場見学や体験活動などの見学会を行うことで，単に見学をするだけでは学べない，体験型で地域の魅力を学ぶ機会を創出している．さらに会員として参加する市議・県議が，月例会やPT活動での意見を議会答弁へと繋げ，公共政策へ反映される動きも見られた．一方で，本庄まちNET代表の仕事として活動が行われてきた宮本蔵の街プロジェクトに着目すると，建築士である本庄まちNET代表の個人の繋がりと，専門アドバイザーらとの繋がりの両者を生かして，プロジェクトを進行していることが分かる．

以上のことから，職業での知見を結びつけながら活動を行っている本庄まちNETの会員の存在が明らかとなった．このように，会の枠組みに拘らず，職業と市民活動の境界を曖昧にして活動してきていることは活動の特徴の一つである．

⑸ 本庄まちNETの活動が地域に与えた影響の考察

前節のように本庄まちNETの活動では，行政・他団体との連携や会員個人の繋がりを活かして活動を行なってきていることが分かる．本節では地域内の協働・共同によって行われてきた活動が，地域にどのような影響を与えてきたかを考察する．まず本庄まちNET設立前後の本庄市の市勢要覧[30)31)32)]や総合振興計画[7)33)]を参照すると，活動で注目してきた郷土料理や陸船車が徐々に掲載されてきており，また地域の将来像として歴史を活かしたまちづくりを掲げるなどの変化が見られる．さらに移住促進サイト[34)]においても蔵や古い建物が多く残る地域として注目されてきており，地域認識が変化してきたことがわかる．このような地域認識は，本庄まちNETの会員がまち歩きや活動を通して深化させ発信してきたものであると考えられ，本庄まちNETの活動が会員以外の住民も地域資源を認識する契機となってきたと考えられる．

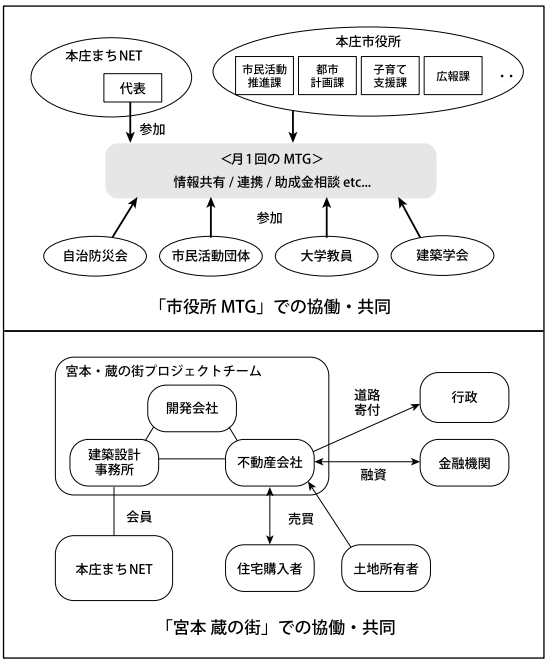

図-11 本庄まちNETの活動における他団体との関係性

⑹ 本庄まちNETの活動の特徴

ここで本庄まちNETの活動の特徴を整理する．まず本庄まちNETの設立経緯から，他の市民活動団体と異なり，公的事業を契機に住民が主体的に行ってきた活動であることや，建築やまちづくりなどの専門的な知見を有する役員・専門アドバイザーなどによって活動の方向性が定められてきたことが明らかとなった．またこれらの活動を負担なく自由に継続するために，補助金を継続的に受け取らないことや，会則によってPTなどの活動が始めやすい運営がされてきている．一方で，会の目的にあるように他団体との連携や繋がりを深めることや，団体の枠に縛られずに主体的に活動が行われてきたことで，団体内で新たな活動を始めるだけでなく，個人の仕事としてリスクをとって活動する会員も存在することが明らかとなった．以上のような，活動のテーマを限定せずにも，興味や関心を基に幅広いテーマを扱い，会員それぞれの考えのもとに主体的に活動が生まれてきたことが本庄まちNETの活動の特徴と言える．

4．活動によって醸成された会員の心情

⑴ ヒアリング調査の概要

本研究では，詳細な活動内容と会員の参加動機や活動のモチベーションを把握するためにヒアリング調査を行った（**表-5**）．ヒアリング調査は，7月と11月に開催された月例会と，会員個別に後日実施したものがある．このヒアリングのうち，本庄まちNETの活動に対する心情に関する記述を抽出し，KJ法を用いて分類を行なった．

⑵ ヒアリングから得られた会員の心情の特徴

ヒアリングにおける記述からは，活動による楽しさや充実感といった心情のほかに，「個人間の繋がり」「居場所（サードプレイス）」「共同」「価値観の違い」「地域への思い」といった心情が分類された（**表-6**）．

これらの心情を，その醸成過程とともに整理する．

a)個人間の繋がり

本庄まちNETの会員のほとんどは，活動することの多い本庄市中心市街地以外に住んでいることもあり，会員が地縁的な繋がりで参加している場合は少ない．その中で定期開催の月例会やPT活動などを通して，会員間の関係性を深めていることが分かった．また活動には会員だけでなく，その家族も参加している場合があり，家族ぐるみでの交流が深められている．このような繋がりを生かして日常的な買い物やお裾分けなどをする会員や，地域のイベントへ一緒に参加する会員の存在が明らかとなった．さらに様々な年齢層・職業の会員が参加していることから，様々なテーマの話を聞くことができ，興味や関心が広がったことを指摘する会員もいた．

b)居場所（サードプレイス）

月例会では本庄まちNETの活動に限らず，日常の話や社会問題に対する議論も多く行われ，交流が図られてきた．またPT活動では，主体的に活動する会員（多くの場合でPTリーダーとなる）を応援する文化が自然と構築されており，得られる安心感によって本庄まちNETを居場所として認識する会員も存在した．また料理や建築など，個人の職能を生かしつつ自由に活動できる場として，いわゆるサードプレイスとなっていることも分かった．

c)共同

1人では経験できない場所への案内や資料の閲覧，また料理を一緒に作ることなど，普段の生活ではあまり体験することのない活動において，その楽しさや大切さを指摘する会員が存在した．本庄まちNET副代表はヒアリングの中で，このような活動における「共通体験」が非常に重要であったことを指摘しており，その体験が様々な活動の視座を育んだと振り返っている．

d)価値観の違い

先述した複数人での共同作業においては，個人間の価値観の共通点や違いを認識する会員の存在が明らかとなった．特に価値観が異なることが分かっても，その違いを否定しないことで，会員が組織や他の会員に対して安心感を抱いていることも分かった．

表-5 ヒアリング調査の概要

調査日程	対象者	内容
2021/7/3	会員15名	7月月例会
2021/7/23	代表	活動概要、活動目的、会則
2021/8/31	代表	PTの変遷、市役所MTG
2021/9/30	代表・副代表b氏	組織運営、団体設立の経緯
2021/11/13	会員12名	参加同期、活動のモチベーション（11月月例会）
2021/11/27	代表	団体の法人化・運営方針
2021/12/4	都市農園事業計画PTリーダー	都市農園事業計画PTの活動内容、本業との関わり
2021/12/6	五臓六腑の会PTリーダー	五臓六腑の会PTの活動内容
2021/12/6	会員（市議）	参加活動内容・別団体の活動との関わり
2021/12/9	副代表a氏	本庄まちNET設立の経緯、団体の目標像
2021/12/11	からくり門弥PTリーダー・副リーダー	からくり門弥PTの活動内容
2021/12/12	副代表b氏	地場産業ふれあいPTの活動内容、本庄まちNETの運営方針
2021/12/19	代表	建築・地域デザインPTの活動内容

e)地域への想い

地域のまち歩きや様々な場所への見学会などを通しては，その地域の魅力を再発見し，「残したい」「復元したい」と考える会員が存在した．また本庄以外の地域出身の会員も参加しており，地域について知ることでその愛着を深めている．その過程においては，専門アドバイザーが影響を与えており，専門的な知見も含めた地域学習となっていた．

(3)醸成された会員の心情に関する考察

前節にて把握された会員の心情の関係性について考察する．本庄まちNETでは，様々な活動によって会員間の共通体験（共同による活動）を重ねる中で，会員間の繋がりを深めていたことが分かった．また構築されていく会員間の繋がりによって，安心感を得たり本業を生かす場として認識し，本庄まちNETを居場所（サードプレイス）と認識している会員が存在した．さらに共通体験を深める中で，他者との価値観の共通点や違いを認識していたほか，地域への興味・関心から，さらにその想いを深めて「残したい」「復元したい」といった地域資源への想いや愛着を醸成していたことが分かった．このような関係性は循環していると考えられ，結果として会員に

表-6 得られた会員の心情とその語り

心情の特徴	ヒアリングでの語りの例
個人間の繋がり	ここに参加してる方、本当に様々な方が参加していて、それぞれの専門家、さっきプロの集団だって話がありましたけども、知見を広められるというか。ここではこんなことが起きてるとかこういう問題があるってことを出てくると、いろんな方向から聞けますので、凄くまず非常にありがたいなと思ってます。
	Oさんっていらっしゃるでしょ。お店をやってるじゃないですか、福祉のお店を。そこに最近は行かないんですけど、職員さん達が取った野菜とか、梅干しとかね、ごまとかを出してたんですよ。だから私、よくゴマを豆いに行っていたんですけど、こないだ聞いたら、去年から、ごまは作ってないって言われて、たまにそういうのでお店とかに豆いに行ったり。
	やっぱり本庄まちNETも、いろんな人がいるからいろんな繋がりがあって、つみっこ美味しいなとか、つみっこ食べに行ったら、あ、AさんがいるとかBさんがいるとかね。なんかちょっとお祭り行ったら、Mさんがいる鳳さんの泉さんがいるとか。そういうのが面白いのかな。
	個の繋がりが、ベースになってるっていうのがまちNETなんじゃないんかなっていう。
居場所（サードプレイス）	誰かが見てくれてるっていうのが、だから本庄まちNETでもみんなが見てくれてるっていうのがあって、近くの人あんまり見てないというか、あんまり興味ないけどでも、身近なねそういう会の人たちが見てくれたりとかしてるっていうのはすごくメリットっていうか、原動力なのかなっていうのが。
	逃げ場じゃないけど、やっぱり褒められてるから、やっぱり気分もいいし、そういうのがあって、
	多分ね、自分の仕事柄ね、ネットワークできてるから、そういった事業所さんと。だからね、そういうときは同書きが非常に役立ったっていう。
共同	そういうことをやったり、それぞれの個人個人が集まりだけど、みんなでそこで何かの活動の動きが、全体でやるっていうことの何か、意味っていうかな、みんなでやることの意味みたいなことの、大切さっていうか、楽しさみたいなものがあって、そうするといろんなことができていくみたいな。
	だから入った時に、じゃあやってとかって言われたのかもしれない。食べるものに。結構みんなで作って食べるっていいことじゃないですか、楽しいじゃないですか。多分それで、食べ歩きもできるし。色のプロジェクトと一緒に、街歩きをして、ついでに食べるものをって組み合わせてもらったりして、結構楽しかったですよ。
	みんなねだから、まちづくりしてるっていうか楽しい体験したがってんじゃないかなっていう。だからうまいもん食べるんだって、1人で食うのとはやっぱりみんなで食べるのと違うじゃない。だから体験するっていうのはすごい大きな、共通体験、それからまちづくりについて議論するとかそういう方が進むんじゃないのって、
価値観の違い	なんだかんだ言ってなるべく出ようとしてて、自分と見方が違うっていうのがあれなんかね、見方が違うのが面白いなんかね。考えが違うんだとか、あってるんだとか、そんなことが、見方が違ったり、そんな風に見てるのかっていうのがやっぱり。
	それで否定しないから、みんなそれが一番いいんじゃないかな。だっていろいろどうせ思うことが違うんだから。行政とかになると、何か答えを見い出そうとするから、どっか方向性を求めてくじゃない。方向性ないから、なんとなくばやっとした感じでここいいよねみたいな。ゴールがあると大変だよね。（中略）さっきの話じゃないけど違うものの見方があったかって知るだけでいいんだから。
	そうですよね。そういった（料理を）うんと調かくやる人とね、いいんだよこれくらいでっていう人とね。
	皆さんでいろいろなところへ行ったり、1人じゃ見られない資料とか、そういったのをたくさん見させていただいて。あと、食べ物ですね。気候・風土・食べ物。楽しいです。すごく、作って食べるのも楽しかったし、食べるのも楽しかったし。人が一緒だから、自分の感覚と人の感覚って違うので、それもすごく楽しいっていうか。なので、あの元々自分の住むところへの興味がもっと広がったかなと思います。だから皆さんとご一緒できてすごく楽しいなと思います。
地域への想い	そこの矢き当たりにお醤油屋さんがあるんですよ。その人も、もうおじいさんっていうか、ご夫婦でやってるんで。あといつまでできるかっていう感じで。麹まんじゅうで、結構美味しくて、おっきくて、今時100円なんですよ。だからこだわって作ってるみたいで。無くならないで欲しいなって思いますけど。
	わたし地元じゃないんですけども、途中から移ってきたんですが、いろんなことがわかってきたし、すごくいろんなことを勉強させてもらったなって思っています。
	やっぱり普段歩かないじゃいですか。車で通っちゃうんで、やっぱり歩くと全然違いますよね。見るものの、目線が違ったり、こういうのがあるんだっていう感じ。

図-11 本庄まちNETにおける会員の心情の醸成

とって居心地の良いコミュニティが構築され，継続的に活動を行うことのできる組織が作られていったと考えることができる（図-11）．

以上のことから考えると，2つの示唆が得られる．まず一つ目は，本庄まちNETという活動の場が居場所として機能したことである．月例会では，PTの活動報告が行うことで，他の会員からの意見や協力が集まり，自分に関わりのない活動でも自然と応援し合う関係性が構築されてきていた．結果として，本庄まちNETの活動に参加することで安心感を得られる居場所となっていたほか，新しい活動へと挑戦しやすい環境が構築され，PT活動が連鎖的に展開されてきたと考えることができる．二つ目は，本庄まちNETの活動が会員の「地域や他者を客観的に認識する視座」を養うことにつながったと考えられることである．本庄まちNETの活動を通しては，職業や血縁・地縁といった関わりを超えた個人間の関係性の再構築に繋がっており，結果として普段の生活では得られない他者や地域への認識を醸成してきたことが分かる．

5．結語

(1) 得られた成果

本研究では，埼玉県本庄市で活動する市民活動団体・本庄まちNETを対象に，その活動の実態と特徴を把握した上で，会員へのヒアリング調査から，活動によって醸成された会員の心情を明らかにすることを試みた．その結果，本庄まちNETでは，活動の負担が少ない環境や活動することを応援しあう関係性が構築されてきたことで，興味を持ったテーマに対して主体的に活動を始めていたり，本業との繋がりを持って団体外での生業に繋げていたりする会員の存在が明らかとなった．このような活動を通しては，「個人間の繋がり」「居場所（サードプレイス）」「共同」「価値観の違い」「地域への想い」といった心情が醸成されてきたことが明らかとなり，「地域や他者を客観的に認識する視座」を養うことに繋がったことが示唆された．

(2) 本庄まちNETの活動の意義に関する考察

本節では，熟議民主主義の視点からコミュニティ政策を考えた伊藤[35]による「わたしたちA・わたしたちB・わたしたちC」を引用しながら，会員個人における本庄まちNETの活動における意義を考察する．

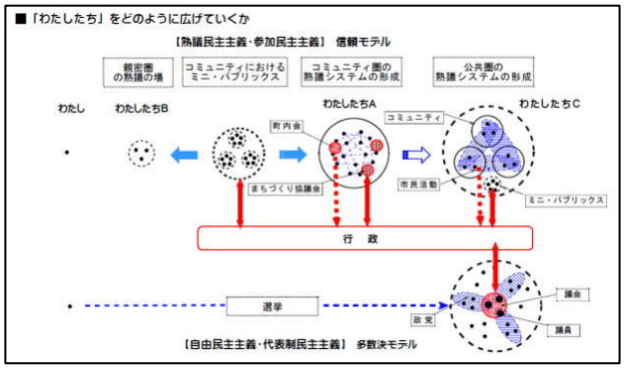

図-12 伊藤による「わたしたちA・B・C」[35]

伊藤は，親密圏と公共圏を結ぶ新たな概念として，それぞれの性質の一部を併せ持つコミュニティ圏を位置付け，コミュニティ圏における熟議，具体的には無作為抽出による討議空間（ミニ・パブリックス）が両者の媒介装置となることを，その実践から指摘している．またその際の熟議は「コミュニティ圏からの熟議」と「コミュニティ圏をめぐる熟議」の2種類の性質があるとし，「コミュニティ圏からの熟議」は，ミニ・パブリックスによる熟議を重ねることで，熟議の場に対する信頼を「わたし」が持ち，結果として公共圏のテーマを議論することのできるコミュニティ圏を形成する性質を持つとして，このコミュニティを「わたしたちA」としている．一方「コミュニティ圏をめぐる熟議」は，「あなた」が持つ親密圏における問題をコミュニティ圏の熟議に持ち込むことで，それぞれの問題解決に応じた連帯によるコミュニティを形成するとしており，これを「わたしたちB」としている．さらにこの「わたしたちB」がネットワークとして繋がり，その規模が拡大することで，公共圏における「わたしたちC」が形成されるとした（図-12）．

この考え方に照らして本庄まちNETの活動を捉えると，その団体の活動が熟議の場の代替となり，地縁によらないコミュニティ圏が形成されていったと考えられる．また活動によって地域の課題を発見し，議論を重ねることで，日常的に考えることの少ない公共圏の課題へと接続していた．加えてPT活動に代表されるように，共通の興味・関心を持つ住民が集まって活動することで，親密圏に近い関係性が構築される．これらは前者が「わたしたちA」，後者が「わたしたちB」の形成の動きに近いと考えられる．一方で，市役所MTGにおける行政と複数の市民団体の関係性を捉えれば，「わたしたちC」形成の動きも見られるだろう．以上のことを考慮すると，活動を通して公共圏の課題を考えてきたことや，身近な課題を共に考えることのできる繋がり（連帯）を持ち活動することの両者が可能な点は，会員個人が活動に参加する上での意義としてもたらされたと考えることができる．

補注

1) 地域に専門家を派遣してまちづくり活動の伴走支援を行う例として、さいたま市や仙台市，大阪市，福岡県など，各地におけるまちづくり専門家派遣制度が挙げられる．また，埼玉県における「NEXT商店街プロジェクト事業」[36]などがある．なお本庄まちNETと直接的な関係を有していないが，NEXT商店街プロジェクト事業は本庄市においても実施されている．
2) 本庄まちNETが過去に行った申請の内容は，①2017年の「本庄地元学だより」の冊子発刊と，②2021年の東京五輪聖火リレーの際の提灯・半纏制作，の2回である．
3) 本庄市市民活動交流センター「はにぽんプラザ」に置かれている，令和2年度はにぽんプラザ登録団体名簿によれば，登録されている市民活動団体は236団体ある．その他に，本庄市のHP[37]によれば，公民館活動として紹介されている活動団体は265団体/約3200人あり，対象地域において市民活動が活発に行われていることがわかる．

参考文献

1) 内閣府：PPP/PFI推進アクションプラン（令和4年度改定版）https://www8.cao.go.jp/pfi/actionplan/action_index_r4.html （参照 2022.08）.
2) 野田浩資：住民参加方地域環境保全の組織論～類型化と予備的考察～，福祉社会研究，pp.64-73，2001.
3) 国土交通省：平成17年度　国土交通白書，https://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h17/hakusho/h18/html/H1022100.html （参照 2022.08）.
4) 中村良夫・鳥越皓之・早稲田大学公共政策研究所編：風景とローカル・ガバナンス　春の小川はなぜ失われたのか　第2章，早稲田大学出版部，2014.
5) 羽貝正美編：自治と参加・協働　ローカル・ガバナンスの再構築，学芸出版社，2007.
6) 伊藤雅春：まちづくりブックレット5 熟議するコミュニティ，東信堂，2021.
7) 増田未来望：本庄地元学だより，本庄まちNET，2017.
8) 本庄市：本庄市都市計画マスタープラン(平成25年)，2013.
9) 本庄市：本庄市総合振興計画　基本構想・前期基本計画（平成30年度～令和9年度），2018.
10) 山村美保里：世代を超えて持続する市民活動の長期継続要因に関する研究―下諏訪町湖浄連を事例として―，土木学会論文集D1（景観・デザイン），Vol.75，No.1，pp.1-11，2019.
11) 寺田千尋・木下光：敷地囲いの変遷を通してみる沖縄県北中城村大城地区の住民主体の景観形成評価に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第60巻，第708号，pp.369-378，2015.
12) 伊藤将司・森本章倫：参加型の社会資本整備事業における継続活動の要因分析に関する研究，土木学会論文集D3（土木計画学），Vol.67，No.5，pp.101-108，2011.
13) 淺野敏久・森保文・前田恭伸・犬塚裕雅：瀬戸内海流域住民の環境保全と市民活動についての意識，水資源・環境研究，Vol.33，No.1，pp.7-14，2020.
14) 榊原弘之・高木将志：地方大学における学生のまちづくり参加意識の形成要因に関する研究-大学所在地に関する学習経験に着目して-，都市計画論文集，Vol.57，No.1，pp.90-97，2022.
15) 芝池綾・谷口守・松中亮治：意識調査に基づくソーシャル・キャピタル形成の構造分析：地域への「誇り」や「信頼」がもたらす影響，都市計画論文集，No.42-3，pp.343-348，2007.
16) 山田俊亮・新谷眞人：旧本庄商業銀行煉瓦倉庫改修工事と構造設計について，建築史学，第67号，pp.196-211，2016.
17) 本橋仁・中谷礼仁：埼玉県本庄市における繭の担保倉庫の発生とその機能　旧本庄商業銀行煉瓦倉庫に関する調査・研究報告，日本建築学会計画系論文集，第82巻，第731号，pp.209-216，2017.
18) 本橋仁・中谷礼仁：明治中期　煉瓦造構造物における煉瓦組積部と木造軸組部の関係　明治29年竣工・旧本庄商業銀行煉瓦倉庫を事例として，日本建築学会計画系論文集，第82巻，第734号，pp.1051-1057，2017.
19) 添田信行：多層化地図を用いた一般的な市街地における場所性の抽出方法～埼玉県本庄における試み～，第39回土木計画学研究発表会・講演集，2009.
20) 本庄市：令和4年世帯人口等一覧(西暦2022年)，https://www.city.honjo.lg.jp/material/files/group/12/setai08.pdf（参照 2022.08）.
21) 山田俊亮・新谷眞人：旧本庄商業銀行煉瓦倉庫改修工事と構造設計について，建築史学　第67号，pp.196-211,2016.
22) 藪谷祐介：まちづくり民活動団体の人材マネジメントに関する組織論的研究，札幌市立大学博士論文，2019.
23) 公益財団法人本庄早稲田国際リサーチパーク：設立背景・目的，http://www.howarp.or.jp/about/ （参照 2022.08）.
24) 早稲田大学：早稲田大学本庄プロジェクト推進室，https://www.waseda.jp/inst/honjopj/（参照 2022.08）.
25) 財団法人本庄国際リサーチパーク研究推進機構：2003年度アニュアルレポート，http://www.howarp.or.jp/cms/wp-content/themes/howarp/pdf/about/ar_2003.pdf(参照 2022.08).
26) 財団法人本庄国際リサーチパーク研究推進機構：まちづくり大学2005-2006 -そして「本庄まちNET」の誕生へ-，2007.
27) 増田一裕：いわゆる「陸船車」の歴史的考察-門弥の陸船車復元を中心として-，資料館研究紀要第4号，埼玉県本庄市立歴史民俗資料館，2008.
28) 増田一裕：元小山川流域若泉周辺の橋梁群について-地域における歴史的景観の研究-，2007.
29) 鈴木浩・山口幹幸・川崎直宏・中川智之：地域再生　人口減少時代のまちづくり，日本評論社，2013.
30) 本庄市：本庄市勢要覧1999，1999.
31) 本庄市：本庄市勢要覧2009，2009.
32) 本庄市：本庄市勢要覧2018，2018.
33) 本庄市：本庄市総合振興計画（平成20年度～平成29年度）.
34) 本庄市：移住情報サイト，https://www.city.honjo.lg.jp/ijujoho/index.html（参照 2022.08）.
35) 大久手計画工房コラム：「わたし」から「わたしたち」を生み出すコミュニティ・デモクラシー(2021.11)，http://ookute.blue.coocan.jp/column.html（参照 2022.08）.
36) 埼玉県：NEXT商店街プロジェクト事業，https://www.pref.saitama.lg.jp/a0802/nextsyoutenngai.html（参照 2022.08）.
37) 本庄市：本庄市の公民館，https://www.city.honjo.lg.jp/soshiki/kyoikuiinkai/shogaigakusyu/tantoujouhou/kouminkan/index.html（参照 2022.08）.